ナショナリズムと文化 (1)

ルドルフ・ロッカー
大沢正道訳

まえがき

「……わたしのナショナリズムに関する著作が近く出版されると聞いて大変うれしい。刊行のできるだけ早いことをわたしは希望する。というのはわれわれは人間の歴史上大きな転換点に到達しており、その時点では同時代の問題の大半が世界-問題とならざるをえず、国民国家の狭い国境内で、あるいは地域の方策で解決できなくなっているとおもわれざるをえないからである。事実、ナショナリズムはいまや人類解放にとって最大の障害の一つとなっている。ナショナリズムはヨーロッパで人民の自然な結びつきを打ちこわし、人間性全体を廃滅の脅威にさらす現状をつくりだした。尨大な人口をもつアジアもまた同じ道を辿るだろうし、その結果も同じであろう。一国もしくは数国の提携と強大国家とによる全アジアの主導権をめぐる永続的な抗争が持ち込まれるであろう。

それこそまさに、強大な国民国家の発展以来、ヨーロッパに起こったことなのだ。スペイン、フランス、イギリス、オーストリア、ドイツ、ロシア、これらの諸国はすべて同じ目的を達成しようとしたが、いずれも失敗した。しかしそれは高価な実験だった。ヨーロッパ大陸の住民はそのために大きな犠牲を払わなくてはならなかった。権力政策はなに一つ本質的な問題を解決できない。それがやれるのは弱少国民をただの暴力で外国支配の下におくことだけだ。なんら問題を解決できないばかりか、前よりももっと大きく、もっと危険な問題を新たにつくりだす。また、東と西の軍事上、政治上の提携も決してなんの理解ももたらさないだろう。両陣営が主張しているように平和を維持するどころか、全大陸を二つの敵対する軍事ブロックに分割する結末となることもまた、ヨーロッパで実験済みだ。この軍事ブロックが戦争を永続的な危険とし、不可避的に二つの世界大戦という怖ろしい破局とゴーストタウンのような様相を呈する現在の状況を導いた。そしてその結果、ヨーロッパ諸国はその国民所得の大半を犠牲にし、世界の大部分を貧困と死と破壊の地獄に変えてしまった。……」

一九五五年五月二十九日付のルドルフ・ロッカーのぼくあての私信の一節である。当時、ぼくは彼の大著『ナショナリズムと文化』

（一九三七年）の翻訳に打ち込み、ロッカーとそのことで文通していた。この翻訳はS社から出るはずだったが、結局、本にならず、ぐずぐずしているうちに、一九五八年、ロッカーは亡くなってしまった。生前にかならず日本訳を届けるという約束も無に帰し、なんとなくはりを失ったまま、訳稿は長く戸棚の奥深くにほこりをかぶっていた。

こんどそのほこりを払って、その第一部を連載しようと思い立ったのは、一つにはロッカーとの約束をやはりなんらかの形で果たしておかないと、あの世で彼に出合った時あいさつしにくかろうという私的な感情もあるが、いま一つには今日の世界の状況――それはロッカーが予測した方向に不幸なことながら突き進んでいる――、それになお立ち遅れている日本の思想状況のなかで、この本は十分に存在を主張しうる古典だと考えたからでもある。

ロッカーは一八七七年にドイツに生まれたアナキストで、青年時代にドイツを追放されて南米へ行き、その後ロンドンの貧民街でユダヤ人労働運動に尽力した。第一次大戦の勃発とともに敵性外国人として収容所に入れられ、終戦後、母国に帰り、アナルコサンジカリズムの国際組織、国際労働者協会の中心メンバーとして活躍した。従来、彼はアナルコサンジカリズムのイデオローグとしてのみみられがちであったが、このベルリン時代に『ナショナリズムと文化』は書き上げられたのである。時あたかもナチスが政権を掌握し、ロッカーはただこの草稿だけを携えて、スイスへ亡命した。のちにナチスは彼の一万冊に及ぶ蔵書を焼いたという。スイスからアメリカへ居を移したロッカーは、第二次大戦中連合国の支持を声明し、若手のアナキストたちの非難を浴びた。第一次大戦でやはり連合国支持を声明したクロポトキンらを批判した一人にロッカーがいたことを思うと、ちょっとした歴史の皮肉を覚える。第二次大戦後も彼はドイツに帰らず、もっぱら著作活動に従事していた。著書には本書のほか、『六人』『アメリカの自由の先駆者たち』『アナルコサンジカリズム、そのスペインでの歴史』『自叙伝』やアナキズム、アナルコサンジカリズムに関する多くのパンフレットがある。

『ナショナリズムと文化』はクロポトキンが『近代科学とアナキズム』で展開した自由と権威との二元的歴史観を受けつぎ、ナショナリズム対文化、政治対経済、国家対社会といった対概念を用いて人類の歴史を眺望する大著で、目次は次の通りである。

第一部　Ⅰ万能でない弁証法的唯物論／Ⅱ宗教と政治／Ⅲ中世――教会と国家／Ⅳ権力対文化／Ⅴ国民国家の勃興／Ⅵ宗教改革と新しい国家／Ⅶ絶対主義――経済発展への障害／Ⅷ社会契約論／Ⅸヨーロッパとアメリカの自由思想／Ⅹリベラリズムとデモクラシー／Ⅺドイツ哲学と国家／Ⅻデモクラシーと国民国家／XIIIロマン主義とナショナリズム／XIV社会主義と国家／XVナショナリズム――政治宗教

第二部　Ⅰモラル、習慣、利益共同体としての国民／Ⅱ言語共同体としての国民／Ⅲ近代人種理論に照らしだされた国民／Ⅳ政治的統一と文化の進化／Ⅴギリシャの政治的分権化／Ⅵローマの集権化とその影響／Ⅶ国民統一と文化の衰頽／Ⅷ国民文化の幻想／Ⅸ国民国家と科学の発達／Ⅹ建築と国民性／Ⅺ芸術と国民精神／XII現代の社会問題／アメリカ第二版へのエピローグ／文献目録

本書の原文はもちろんドイツ語だが、オランダ、スエーデン、フランス、スペイン、英語、イタリー、イディッシュなど七カ国語に

訳され、英語版に対してはラッセル、アインシュタイン、トーマス・マン、デュラント、マンフォード、ハーバート・リードらが讃辞を寄せている。たとえば、「……要するに『ナショナリズムと文化』は『カンディード』『人間の権利』『相互扶助論』が占めているのとおなじ棚におかれるに価いする書物である」（マンフォード）、「ルドルフ・ロッカーの『ナショナリズムと文化』は二つの理由で政治哲学に重要な貢献をしている。一つは多くの著名な著作家についての鋭い、また広く啓発させられる分析のゆえであり、いま一つは国家信仰の見事な批判のゆえである。国家信仰は現代流行の、最も有害な迷信なのだ。公正な思考がまだ非合法にされていないすべての諸国で広く読まれることを希望する」（ラッセル）といった具合である。ちなみに小著『アナキズム思想史』も本書に多く負っていることをそっと告白しておこう。

翻訳に使用したテキストは、Rudolf Rocker: *Nationalism and Culture* (translated by Ray E. Chase), 1st edition 1937, 2nd edition 1946. である。

第一章　万能でない弁証法的唯物論

歴史における政治的影響を深く究めるにつれて、今日までのところ「権力への意志」が、人間の社会形体を発展させるもっとも強力な動機の一つであったことが明らかになってくる。すべての政治上、社会上の事柄が、与えられた経済状態の結果にすぎず、それによって解明できるという考えは、綿密な考察に耐えることができない。経済状態と社会的生産の特殊な形態が、人間性の進化の上で一つの役割を果たしていることは、社会現象の根抵を真面目に探ろうとする人ならみなよく知っている。このことはマルクスがそれを彼一流の方法で説明する以前に、すでに十分に知られていた。サン・シモン、コンシデラン、ルイ・ブラン、プルードンら多くのすぐれたフランスの社会主義者たちは、それを彼らの著述のうちに記している。そしてマルクスはこれらの著述の研究を通じて、社会主義に到達したのである。のみならず社会生活の構造に及ぼす経済状態の影響とその意義の認識こそ、社会主義の本質であったのである。

マルクス主義者の公式のなかでもっとも特徴的なのは、この歴史的な、哲学的な概念の確認ではなくて、その概念を表現している断固とした形式と、マルクスが基礎づけた思考方法である。そこにはヘーゲルの影響がはっきりうかがわれる。マルクスはヘーゲルの弟子である。「絶対の哲学者」「歴史的必然」と「歴史的使命」の発明者を除いて、誰が彼にこのような自信たっぷりな判断をわかつことができよう。ヘーゲルのみがマルクスに自分は「社会科学の諸法則」の根抵に達したという信念を喚起させえた。それによると、各各の社会現象は諸事物の自然な必然的過程の決定論的表現とみなされなくてはならない。じじつマルクスの後継者たちは「弁証法的唯物論」を、コペルニクスやケプラーの発見と比較しており、この歴史の解釈によって社会主義は科学になった、と揚言したのはエンゲルスその人であった。

この理論の根本的な誤りは、それが自然における機械的な物の成行きと、社会現象の成行きとを同一視しているところにある。科学はわれわれが自然と呼ぶ大きな舞台で演ぜられる諸現象にのみ注意を集中する。それ故それは空間と時間に限定され、人間の予測する考えに左右され易い。なぜなら自然の領域は内的な結びつきと機械

的な必然の世界であり、そこでの事実はことごとく因果律に応じて起こる。この世界には偶然はない。気ままな行為というものを考えることはできない。この故に科学は厳密に事実だけを取上げるのである。以前の実験とは逆になったり、ある理論と一致しない事実が一つでもあれば、それだけでそれがどれほど精緻な理論であっても、一擲されてしまう。

形而上の思考の世界にあっては、すべての法則には例外がある、という実際的な意見も価値があるかもしれないが、科学の世界には決してそんなことはない。自然が作りだした形は無限に多様であるけれども、そのいずれもが同一不変の法則に従属している。宇宙における運動はみな厳格で容赦ない法則に従って行われる。それは地上の生物における物理的な部分の場合と同じことである。われわれの内の物理的な部分を支配する法則は、人間の意志の気紛れには従わない。それらはわれわれの生存にとって欠くことのできないもので、それなしにわれわれの存在を考えることは不可能である。われわれは誕生し、栄養を摂取し、不用物を排泄し、運動し、生殖し、分解に接近する。われわれはこの過程のどの部分をも変えることができない。ここではわれわれの意志を超越する必然が作用している。人間は自然の力を彼の目的のために役立て、ある程度その作用を一定の方向に導くことができる。しかし人間はそれを止めることはできない。同じように、われわれの物理的部分を条件づけている個々の事物を勝手に変えることは不可能である。われわれは外的な附随現象を磨き上げ、それをわれわれの意志に適応させることはできるが、事物それ自体をわれわれの生活から取除くことはできない。われわれは自然がわれわれに提供してくれたそのままの形で食物を消費したり、与えられただけの場所で横になって眠らなくともすむが、食事や睡眠なしにすますことはできない。そんなことをすればわれわれは忽ち死んでしまう。この峻厳な世界で人間の意志の働く余地はないのである。

宇宙的な、物理的な事物の永遠の運行における鉄の法則のこの発見が、多くの明敏な頭脳の持主に人間の社会生活上の事物も同じ鉄の必然に従っており、それ故科学的な方法で予測し、説明できるという考えを持たせるに至った。ほとんどの歴史理論はこの誤った考えに毒されている。それは物理的部分の法則と、人間の思考の結果とみなされうる人間の窮局目的とを同一視する場合にのみ、人間精神のうちに一つの立場を見出すことができるにすぎない。

われわれは歴史のうちにもまた内的なつながりのあることを否定しない。それは自然におけるように、原因、結果で跡づけることさえできる。けれども社会的な事物にあっては、それはつねに人間の窮局目的についての因果律の問題であり、自然においては物理的必然の因果律のそれなのである。後者はわれわれの立場におかまいなく起こるが、前者はわれわれの意志の表明にすぎない。宗教的な観念、倫理的な概念、慣習、習慣、伝統、法的見解、政治組織、財産制度、生産形態等々はわれわれの内の物理的部分が必然にもたらしたものではなく、あらかじめ考えられた目的に到達しようとする、われわれの欲望の結果にほかならない。目的についての観念は、みな科学的な計算からはずれた信念の問題になっている。物理的な事物の領域ではねばならぬだけで計られる。信念の領域にはただ蓋然性のみがある。それはそうであるかもしれない、しかしそうあらねばならぬということはない。

われわれの内の物理的部分から起り、それに関連する各々の過程は、われわれの意欲の外側にある事柄である。けれども社会過程はいずれも人間の意図と目的設定から生じ、われわれの意欲の限界内に起こっている。それ故それは自然的必然の概念には従属しない。

扁頭インディアンの婦人があらたに生まれた子供の頭に二枚の板をあてて、望ましい形にしようとするのは必然ではない。それは一つの慣習にすぎず、その説明は人間の信仰のうちに見出される。人間が一夫多妻、一夫一婦、あるいは独身の制度を取るのは、人間の目的性の問題であって、物理的な事物の法則やその必然となんの関係もない。法律上の見解もまた信念の問題であり、なんらかの物理的必然に左右されるものではない。人間がイスラム教徒であるか、ユダヤ教徒であるか、キリスト教徒であるか、それともサタンの崇拝者であるかは、彼の内の物理的部分とはいささかも関連がない。人間は彼の内の物理的部分が従属している法則に少しも影響されずに、なんらかの経済関係のうちに生活し、なんらかの政治生活の形態に自らを適応させることができる。重力が突然なくなったら、その結果を考えることはできないであろう。われわれの肉体的機能の急激な停頓は死を意味している。しかしもし人間がハムラビの法典やピタゴラスの定理や、あるいは史的唯物論を知らないとしても、人間の物理的な部分は全然無傷であろう。

われわれがここで述べていることは、かたよった見解ではなくて、たんに一つの確立された事実にすぎない。人間の目的性の成果は人間の社会的存在にとって言うまでもなく重要であるが、社会過程をみなして事物の必然的な推移の決定論的な表現とすることは止めるべきである。このような見解はもっとも誤った結論を導きだし、歴史的事実の理解に際して、運命的な混乱をもたらすだけである。

もちろん歴史的な事実の内的なつながりをあとづけ、その原因・結果を明らかにすることが歴史家の仕事である。けれどもこれらの関連が自然の物理的な事柄のそれとは異質のものであり、従って全く異なった評価を持たねばならぬことを忘れてはならない。天文学者は日蝕や彗星の出現を一秒も違えずに予言することができる。海王星の存在はこのようにして人間の眼で見る以前に予測されていた。しかしこうした決定はわれわれが物理的な事物の動きを取扱っている時にのみ可能である。人間の動機や目的・結果の予測に写しはない。なぜならそれはどんな場合にも予測されないからである。種族や民族や国民、あるいは他の社会的統一体の運命を予測したり、予言したりすることは不可能である。それらの過去を完全に説明しつくすことさえ不可能である。なぜなら結局のところ、歴史とは人間の窮局目的の偉大な闘争場裡にすぎず、それ故すべての歴史理論は精々蓋然性に基づいた信念の問題なのである。それに決して揺ぐことのない確実性を要求することはできない。

社会構造の運命はいわゆる「社会科学」の法則によって決定できるという主張は、紅茶茶碗や手相で人間の運命を読むことができるという、賢そうな婦人たちの言い分と大同小異である。実際星位図を人民や国民のために投げ与えることはできるが、しかし政治的な、社会的な占星術の予言は、星の位置で人間の運命を占うと言う人々の予言より価値のあるものではない。

歴史理論が歴史事実の解明にとって重要な観念を内包するかもしれないことは否定できない。われわれはただ歴史過程が自然における物理的な、あるいは機械的な現象と同じ（もしくは類似した）法

則に従属する、という主張に反対するのである。この誤った全く不当な主張はいま一つの危険を蔵している。一度われわれが自然的事実の原因と、社会変化の原因とを一つの盤に投じてしまうなら、われわれはまた根本的な第一原因を求めようとしがちになる。それはすべての歴史事実を包含する、社会的な重力の法則といったものを構成するであろう。そこまでゆけば社会構造の他の諸原因や、それらから生ずる相互作用を見過すことなど容易である。

彼がその下で生活している社会状態の改良にかかわる人間の概念は、最初はたんに蓋然性に基づくところの願望である。これらが問題にされる場合、科学はその限界に到達する。なぜならすべての蓋然性は計算したり、計量したりすることのできない仮定を根拠としているからである。例えば社会主義のような世界観にとって、科学的探究の成果を要請することが本当に可能だとしても、その概念それ自体は科学ではない。なぜならその目的の実現は物理的自然における諸事実のように、固定した決定的な過程に依存していないからである。歴史のうちに法則はない。それは人間の社会的活動の道筋を示すだけである。今日までこのような法則の存在を証明しようとする試みが幾度か行われたが、その都度それが全く無駄な努力であることが直ちに明らかにされた。

人間は彼の内の物理的部分の法則に無条件に従属している。彼は自分の組立を変えることはできない。彼はその物理的部分の根本条件を止めたり、それを彼の思い通りに変えたりすることはできない。この世の旅の果てを防ぐことができぬ以上に、彼はこの地上への出現を防ぐこともできない。彼は自分の一生がその道筋に沿って繰り拡げられる星の軌道を変えることはできず、空間における地球の運行の結果を寸分違わず受取らなくてはならない。しかし彼の社会生活の形成は、それが彼の意志と行為の結果である故に、この必然の道程には従属しない。彼は彼がその下で生活している社会状態を、聖なる意志によってあらかじめ定められたものとして受容れることも、あるいは彼の意欲に従わない不変の法則の結果とみなすこともできる。前者の場合、信仰は彼の意志を弱め、彼を導いて与えられた状態に自らを順応させるよう仕向けるであろう。しかしまた彼はすべての社会形態は一つの条件づけられた存在であるにすぎず、人間の手と人間の心によって変えることができると確信することもできる。この場合彼は彼の生活している社会状態を他のものに置き換えようと努め、彼の行動を通して社会生活の再形成のために道を開くであろう。

人間がどれほど十分に宇宙の法則を知りつくしたところで、彼は決してそれらを変えることはできないであろう。それは彼の仕事ではないからである。しかし過去が遠い先祖からの遺産として彼に贈った社会存在や社会制度の諸形態は人間の仕事であり、従って人間の意志と行動によって変えることができ、また新しい目的のために役立たせることができる。このような理解の仕方のみが真に革命的であり、来るべき時代の精神によって鼓舞されるのである。歴史事実の必然的な結果をことごとく信ずる者は、未来を過去の犠牲に供するものである。彼は社会生活の現象を説明はするが、それを変革はしない。この点で運命論は、それが宗教的であれ、政治的、経済的であれ、同じことである。その陥穽に陥った者は、それによって人生のもっとも貴重な所有を奪われる。すなわち彼自身の必要に応じて行動する衝動を奪われるのである。運命論が科学の装いをつけた時

にはとくに危険である。今日それはしばしば神学者の法衣と取って代っている。それ故にわれわれは繰返し言う。社会生活の過程を裏づける原因は、物理的な、機械的な自然的事実の法則と共通するところがない。なぜならそれらは純粋に人間目的の結果だからである。それを科学的な方法で解明することはできない。この事実を誤認すると、現実についての混乱した概念しか生まない運命的な自己欺瞞に陥ってしまう。

このことは社会事実の過程の必然性を基礎におくすべての歴史理論に適用される。とりわけそれは史的唯物論にあてはまる。それは歴史事実を一般の生産条件にあてはめ、それからすべてを説明しようとしている。経済状態を考慮することなしに、歴史事実一般を評価しえないことは、今日、考えある人の等しく認めているところである。けれどもすべての歴史がたんに経済状態の結果にすぎず、すべての他の生活現象がその影響の下に形態と特質を得ている、と主張する見解はあまりに一方的である。

歴史には純粋に経済的な理由、あるいはそれだけで説明することのできない無数の事実がある。一定の図式の枠のなかに一切をはめこむことは可能であるが、しかしその結果はつねにその努力に価いしない。経済的な原因がその形成になんら力となっていないような歴史事実はほとんどない。しかし経済的な力が他のすべてを動かす唯一の力でもないのである。すべての社会現象は一連の多くの原因の結果であって、多くの場合、それは内的に関連しており、一つ一つをはっきり区分することは全く不可能である。われわれはつねに種々の原因の相互作用を取扱っている。普通それははっきり認識できるが、しかし科学的な方法で予測することはできないのである。

何千万の人間にとって深い意義を持ち、しかも純粋に経済的な面からだけ説明しつくすことのできない歴史事実は幾つもある。例えばアレクサンドロスの侵略が当時の生産条件から引起された、と誰が主張するであろうか？　アレクサンドロスが何十万の血潮をもって打ち建てた巨大な帝国が彼の死後まもなく崩壊してしまった事実こそ、マケドニア世界の軍事的な、政治的な業績が経済的必然によって歴史的に決定されていなかったことを証明する。またそれはいささかも当時の生産条件を前進させはしなかった。アレクサンドロスがその侵略を計画した時、権力欲は経済的必然以上に重要な役割を果たしていた。世界征服の野望は野心的な専制君主にとって、つねに病理学的な形となって現われている。彼の気違い染みた権力妄想が彼の全政策のライト・モティーフであり、好戦的な施策の推進力であった。それは当時知られていた世界の大半を、流血と強奪で埋めたのである。東方の専制君主の帝王―教皇政治主義が、彼にとって望ましくみえたのも、彼が半神格をその信条としたのも、いずれもこの権力妄想のためであった。

個人から、あるいは社会の少数者から生じる権力への意志は、事実、歴史におけるもっとも重要な推進力の一つであった。しばしばそれが経済的な、社会的な全生活の形成に決定的な要因となっているにもかかわらず、今日までその影響の範囲は過少に評価されている。

十字軍の歴史はもちろん強力な経済的動機によって影響されている。東方の黄金の国という幻想は多くの土地欠乏卿や無一文卿にとって、宗教的な信仰以上に強い魅力であった。しかしもし彼らが「神は望み給う！」の叫びとともに、無分別に突進する信仰妄想に

捉われていなかったなら、経済的動機だけでヨーロッパ全土の何千万の人間を動かすことはできなかったであろう。彼らはこの異例の冒険に伴う数多くの困難を少しも気に留めていなかった。当時の人民に及ぼしていた宗教信仰の強さは、一二一二年のいわゆる子供十字軍のうちにうかがわれる。それは先発の十字軍の失敗がさらにはっきりした時に結成された。敬虔な狂信者は聖墓は弱年の人々によってのみ解放されるであろう、彼らを通じて神は世界に奇蹟を示されるであろう、というお告げを明らかにした。何万の両親を説得して、彼らにとって最愛のものを確実な死へと赴かせたのはたしかに経済的動機からではなかった。

しかも最初キリスト教世界に呼びかけて、第一次十字軍の遠征をためらいがちに決定した教皇ですら、経済的動機よりはむしろ政治権力の必要に動かされていた。教会の主導権争奪の争いの際、国内の手に負えない封建諸侯を長期間東方の地に縛りつけておくことは、その指導者たちによって非常に有利なことであった。教会は彼らに邪魔されずに計画を遂行できたからである。もちろん例えばヴェネチア人のような連中もいた。彼らはすぐ十字軍によって莫大な富を入手しうることに気がついた。彼らは十字軍遠征を利用してその支配権をダルマチア沿岸からイオニア諸島、クレータ島にまで拡げた。しかしこれから帰納して、十字軍が当時の生産手段に必然的に規定されていた、と主張するのは全然無意味である。

教会がアルビ教徒絶滅の戦いを決意した時にも、なんら経済的な考慮によってこの異教徒に対する戦争を始めたのではなかった。それは何万人という人命を損い、ヨーロッパでもっとも自由で、もっとも進歩した土地を荒廃させ、高度に発達した文化と産業を破壊し、交易をまひさせ、その背後に辛じて生き残った疲弊しきった住民を残した。それは信仰の統一のために闘われ、その行為の底には政治権力の問題が横たわっていた。同じようにして、後にこの戦争で教会側を支持したフランス王国も、主として政治的な考慮によって鼓舞されていた。この血腥い戦争の結果、それはプロヴァンス伯の領地となり、それによってこの国の南部がすべてフランス王国の所有するところとなったのである。そして王国は自然に一層権力の集中に務めるようになった。つまりヨーロッパでもっとも富裕な土地の一つの経済的発展を容赦なく妨げ、すぐれた文化の古き住家を廃墟と化してしまったのは、おもに教会と国家の政治的な動機によるといえるのだ。

アラブ人による大侵略、とくに七百年戦争を起こした彼らのスペイン来寇は、当時の生産条件の完全な研究をもってしても説明することができない。経済状態の発達があの腕づく時代の指導力であった、と証明してみようとしても徒労である。この場合事実は明らかに全く逆である。アラブ人の最後の牙城であるグラナダ政略後、スペインには新しい宗教的政治権力が起こり、その有害な影響を受けて、スペインの経済発展はことごとく数百年後退した。この重圧は猛烈であり、その結果は今日に至るまで全イベリア半島に残っている。アメリカ大陸発見後、メキシコと前インカ帝国からスペインに流れ込んだ莫大な金をもってしても、その経済的衰頽を止めることはできなかった。事実はたんにそれを促進したにすぎない。

アラゴンのフェルディナントとカスティルのイザベラの結婚は、スペインにおけるキリスト教王国のいしずえとなり、その右腕に大審問官が控えていた。教会の旗の下に行われたアラブ権力に対する

絶えまない戦争は、キリスト教住民の知的な、精神的な態度を根こそぎ変えてしまい、スペインを数百年に渉って暗黒に閉じこめた残忍な宗教的ファナチズムを作りだした。このような前提の下でのみ、あの怖るべき政治的教権専制主義は育ったのである。それはスペインの都市の最後の自由が流血のうちに葬り去られた後に、三百年の間怖しい妖魔のようにその国に君臨していた。この独特の権力組織の圧制的な影響の下に、アラブ文化の最後の面影も失われ、ユダヤ人、アラブ人が第一にスペインから追放された。かつて花咲く庭園のようであった地方も、ことごとく不毛な荒地に変じた。なぜならアラブ人の灌漑施設や道路の破壊が公認されていたからである。ヨーロッパで第一級であった産業も、完全にその国から姿を消し、住民はずっと昔の生産手段に戻っていった。

フェルナンド・ガリドの記録によると、セビーレには十六世紀の始めに千六百錘の絹紡織機があり、十三万の労働者が働いていた。十七世紀の終りには実動織機はわずかに三百錘であった。

「十六世紀にトレドにどれほどの織機があったか知られていないが、年に四十三万五千ポンドの絹を織り、三万八千四百八十四人の人が傭われていた。十七世紀末になると、この産業は完全に消滅している。セゴビアでは十六世紀末に、当時ヨーロッパで最上とされていた毛織布を織る織機が六千錘あった。十八世紀の初頭にはこの産業は衰え、布地の織り方と染色をセゴビア人に教えるために、外国の労働者が招かれた。この衰微の原因はアラブ人の追放とアメリカの発見及び移住、そして仕事場を空にし、僧侶や修道僧を殖やした宗教的狂信である。セビーレで織機の数が三百錘になった時、修道院の数は六十二を数え、僧職にあるもの一万四千人に達したのである。[1]」

「またザンカダは当時について書いている。「一六五五年、十七のギルドがスペインからなくなった。それと共に鉄、鋼、銅、鉛、硫黄、明礬、その他の産業の労働者も姿を消した。[2]」

スペイン人によるアメリカ大陸の征服すら、個々のスペイン人がどれほど貪らんであったとしても、「金の渇望」からだけ説明しつくすことはできない。それはイベリア半島の人口を激減させ、何千万人の人々を新世界へと招いた。われわれが有名な征服の歴史を読む時、プレスコットも言っているように、それがとくにスペインで愛され、もてはやされた遍歴騎士の無数のロマンスと、寸分違わぬような事実に満ちていることに気づくであろう。

作り話の黄金郷エル・ドラドへと、荒漠たる大洋を越えて大胆な探検者たちを相次いで引寄せたのは、たんに経済的な理由のためばかりではなかった。数百万の人口を擁し、かなり高度の文化を持っていたメキシコやインカのような大帝国は、一握りの自暴自棄的な冒険者のために滅ぼされた。彼らは自分の生命を重じておらず、手段を選ぶことなく、危険をものともしなかったのである。この事実は七百年戦争を通して次第に進化していった、危険にさらされて頑なになった彼らの特異な性格を綿密に考察して始めて理解される。人間同士の平和という考えが、ずっと昔に消え失せたおとぎ話のように思われ、あらゆる残虐行為を伴う数世紀間の戦争が当り前のこととされているような時代のみが、当時のスペイン人の野蛮な宗教的ファナチズムを育て上げたのである。この観点から絶えず冒険を探し求める熱望は説明されよう。往々にして真の裏づけのない誤解された名誉感のために、人はすぐにでも死ぬ覚悟をする。スペイン

においてドン・キホーテ的性格が発達したのも偶然ではない。心理学的な発見をもって、すべての社会学と置き代えようとする学説はたぶん行過ぎであろう。しかし人間の心理状態がその社会環境の形成に強い影響力を持っている事実は否定できない。

経済が社会発展一般の重心の中枢でないことを明らかにする例はまだいくらでも引用できよう。もちろん経済は歴史の形成過程で重要な役割を果しているが、それは過度に誇大評価されるべきでもなく、また見過されてもいけない事実なのである。社会的事実の成行において、経済的環境の意義が驚くほど明白な時代もあるし、また政治的な、宗教的な動機のために、明らかに正常な経済成長を無理矢理に阻まれ、長い間その自然な発達を禁ぜられ、あるいは別の方向に伸びざるをえなくなった時代もある。宗教改革や三十年戦争、ヨーロッパでのいくつかの革命のような歴史事実を、純粋に経済からだけ説明することはできない。けれどもわれわれはこれらの事実において、経済的要因が一つの役割を果たし、それらを助成していたことを無視するものではない。

この誤った見解はわれわれが一定の時代における種々の社会層を、全く限定された経済的利害関係の、典型的な代表に一致させようと試みる時、一層有害である。このような見方は学者の一般的な視野を狭ばめるばかりでなく、歴史全体を歪めたものにしてしまう。それはただ誤った結論に到達するだけのことである。人間はたんに純粋に特殊な経済的利害の当事者だけのものではない。例えばブルジョアジーが社会的に勢力を持つに至った諸国において、彼らはしばしばその経済的利害から割出せないような、むしろそれと全く相反する如き運動を支持している。教会に対する闘争、諸国民間に永久平和を確立しようとする努力、政府の性格に関する自由で、民主的な見解、王権神授の伝統ともっとも烈しく闘った代表者の選出、そのほか彼らが時に熱狂を示した多くの主張がこのことを証明する。

その経済力の影響が着実に成長してゆくにつれて、ブルジョアジーはすぐに初期の理想を忘れた、あるいは公然とそれを裏切ったと論じてもだめである。ヨーロッパにおける社会主義運動の疾風怒濤時代と、今日の労働者政党の実際上の政策とを比較する時、われわれはプロレタリアートの自称代表者が、その内的な変節の故にブルジョアジーを攻撃する立場にいないことを知るのである。これらの諸政党は資本主義世界が終焉しようという最悪の危機の時代に、社会主義精神の影響を経済状態にあたえるべきなんの努力も払っていない。しかも決して資本主義世界を完全に変革するに十分なほど、経済条件は成熟していない。全資本主義制度はその支配力を失っている。かつて資本主義世界にとって周期的な現象であった危機が、ここ数年の間社会生活の平常の状態となっている。産業危機、農業危機、商業危機、財政危機！　すべては一致して資本主義制度の欠陥を示している。三千万に近い人間が過剰生産のために破滅に瀕している世界の真只中でドン底生活をよぎなくされている。けれども精神が欠けている――社会生活の根本的な再建を求め、たんに危機を引伸し、決してその真因を癒すことのできない間に合わせ仕事に満足しない社会主義精神が欠けている。彼らの欲望に翼を与え、彼らの分散した力を共同の仕事に結びつける精神的な、知的な前提が人間のうちに現われない限り、経済状態だけで社会構造を変革できないことが、今日ほど明らかにされた時はない。

しかし社会主義諸政党や彼らの思想の滲透している労働組合組織は、社会の経済的再建が問題になった時失敗しただけではない。彼らはブルジョア・デモクラシーの遺産を守ることすらできなかったのである。なぜなら彼らは至る所で長い間に獲得された権利と自由を、一戦を交えることもなく譲り渡し、このようにして彼らの意志に反しながら、ヨーロッパにおけるファシズムの発展を助けたのである。

イタリーでは社会党のもっとも有名な代表者の一人が、ファシスト・クーデターの下手人となり、著名な労働運動の指導者の一団は、彼らの首領ダラゴナと共に旗を振って、ムッソリーニの陣営に行進した。

スペインでは社会党は独裁者プリモ・デ・リベラと妥協した唯一の党派であった。それは今日殺害された労働者の血潮で紅に染っている、光栄ある共和国の時代においてすら、資本主義制度の最上の擁護者であろうとし、政治的権利の制限のために喜んで努力しようとしている。

イギリスにおいてわれわれは、もっともよく知られかつ有能な指導者が、突然ナショナリズム陣営に転じた特異な情景を目撃している。それによって彼らは彼らが長年の間の擁護者であった党に、致命的な打撃を与えたのである。その際フィリップ・スノーデンは昔の同志を非難して「彼らは国家のためよりは、自分たちの階級の利害を重じている」と言ったが、この非難は不幸にして正当ではなく、彼がいま呼ばれているような「閣下」には誠にふさわしいものである。

ドイツでは社会民主主義は労働組合同様に、全力を挙げて大産業資本家の邪悪な産業「合理化」を支持していた。それは労働者に破局的な影響を及ぼし、意気沮喪したブルジョアジーに敗戦の衝撃から立直る機会を与えた。ドイツ共産党のような自称革命的労働者党ですら、反動の国家主義的なスローガンを自分のものとし、そのすべての社会主義的原理を頭から否認するスローガンによって、逆にファシズムの脅威を防ごうと考えていた。

他にいくつも例はあるが、これらの実例は組織された社会主義労働者の大多数の代表には、ブルジョアジーを政治的な無責任とか、かつての理想の裏切りの故に責める権利のないことを示している。最近の選挙で自由主義やブルジョア・デモクラシーの代表者たちは、存在価値のあることを示した。一方プロレタリアの利益を守ると自任する連中は、恥知らずな自己満足をもって彼らの以前の理想を棄て、彼らの反対者の仕事をしようとしている。

社会主義的な思想に影響されていない一連の主要な経済学者たちは、資本主義制度の時代は終ったこと、そしてもしヨーロッパが崩壊しないならば、無制限な利潤経済に代って、新しい原理に基づく使用のための生産経済が樹立されなければならない、という見解を明らかにしている。けれどもそれは運動としての社会主義が決してその状況を迎えるほどに成長していないことをさらに明らかにするだけである。社会主義運動の代表者の多くは、かたよった改良以上には決して進まず、彼らの力を危険であると同時に、目的を失った闘争に浪費している。彼らの馬鹿気た偏狭さは知的に硬化した教会制度の行状を思い出させる。何十万の社会主義者が絶望に陥り、第三帝国の鼠取りに引っかかるのをみて驚くのは少数である。

社会主義者の援助がなくても、生活の必要それ自体が現存の経済

状態の変革の方向に動いているのだ、なぜなら施すすべのない危機は遂に耐えられなくなるであろうから、と反駁することもできよう。われわれはこれを否定しない。しかしわれわれは現在の社会主義労働運動の譲歩のために、生産者の発言が絶対に許されない経済的再建が行われはしないかと危惧している。彼らは他の連中が彼らのために作った既定の事実と抗争し、やがて将来は引続き彼らのためにあてがわれた人夫の役で満足しなくてはならないであろう。あらゆる徴候がわれわれを欺かぬなら、われわれは国家資本主義の時代に向って滔々として歩みつつあるのである。それは労働者にとって、たんに人間を生産手段とみなすだけではなく、すべての個人的な自由を完全に奪い取る、現代的な奴隷制度の形態と考えられる。

一定の環境の下で経済状態が極めて切迫してくると、現存の社会制度の変革が生々した必然性を持ってくる。そこでわれわれが今後どの方向に動いてゆくかが問題になる。それは自由への道であろうか、それとも改新された奴隷制への道であろうか？　つまり人間に不十分ながら生活を保証するが、彼から行動の自由をすべて奪い去る道であろうか？　これが、そしてこれのみが問題である。インカ帝国の社会組織はその臣民の一人一人に必要な生存の手段を保証したが、土地は無制限な専制主義のものであった。それはその命令に対する反対も残忍に罰し、個人を国家権力の無意志な道具にまで切下げた。

国家資本主義は現今の危機を逃れる一つの道であるかもしれない。しかしさらに確かなことは、それが社会的な自由への道ではないということである。それどころか、それは全然人間の尊厳を嘲る奴隷の泥沼に人間をつき落すであろう。どの個人にも、どの建物にも、一定の平等な社会的条件がある。誰もが同じ食物を食い、同じ衣服を着、同じ役務に従い、同じ仕事を行う。だが誰がこのような状態が、そのために骨折るだけの値打ちのある目的だと思うだろうか？

社会組織の各成員が彼らの運命の主人であり、自分自身の問題を統御し、共通の利害をもつ問題の遂行に参与する譲渡すべからざる権利を持つか、それとも彼らがそれになんら加わることのない外部の意志の道具になり下るかが、問題の分れ目である。兵士はいずれも共通の糧食を受ける権利を持っている。しかし彼は彼自身の判断を持つことを許されない。彼は盲目的に上官の命令に従い、必要とあらば彼自身の良心の声を沈黙させなくてはならない。なぜなら彼は他の者が仕掛けた機械の一部分でしかないのだから。

人間のすべての活動に干渉し、それらに刻印を押しつける全能な官僚制度ほど耐え難い圧制はない。個人生活を支配する国家権力が無制限になるほど、それは個人の創造的能力を殺し、彼の個人的な意志の力を弱める。真の社会主義のもっとも危険なアンチテーゼである国家資本主義は、すべての社会活動の国家への降伏を要求する。それは精神に対する機械の勝利であり、すべての思想、行動、感情の権力者の定まった尺度による合理化であり、従ってすべての真に知的な文化の終焉である。この怖るべき発展は今日十分に見通されているとはいえず、それが現代の経済状態の必然であるという思想すら受容れられている。それは現代のもっとも運命的な徴候とみなされてよいかもしれない。

社会現象のうちに資本主義的生産方法の必然的な結果しかみない危険な狂信者は、すべての社会的事実は一定の必然から生じ、経済

的に変えることはできない、という信念を人々のうちに植えつけた。この運命論的な考えは人間の抵抗する力を殺し、それがどれほど怖しく、非人間的なものであっても、与えられた条件と妥協することをよしと思わせるに至った。

経済状態が社会関係の変革に一つの影響を及ぼしていることはみな知っている。けれども人間が彼の思想や行動においてどのようにしてこの影響に反撥するかは、どの段階で明らかに必要な生活状態の変革を彼らが主導するかを決定する際に、極めて重要である。しかも経済的な動機の足跡を拒んで受容れないのも、人間の思想と行動なのである。例えば誰がアングロ・サクソン民族の精神的な発達に、今日まで決定的な影響を与えたピューリタニズムが、その初期において資本主義的経済秩序の必然の結果であったと主張するであろうか？　あるいは第一次世界大戦が資本主義制度に絶対に条件づけられており、従って不可避であったと証明しようと、誰が試みるであろうか？

経済的利害関係は疑いもなく、それが他の場合に果しているのと同じように、この戦争においても重要な役割を演じている。しかしそれのみでこの運命的な破局を作りだすことはできなかったであろう。具体的な経済目的を生真面目に述べたてただけでは、大衆は動じない。それ故彼らがそのために殺し、またそのために彼ら自身も死ぬような争闘が、「正しい立派な主張」を持っていることが証明されなくてはならない。そこで一方は「ロシア専制主義の打倒」「ポーランドの解放」、――そしてもちろん連合軍が潰そうとしている「祖国の利益のために」闘う。他方は「デモクラシーの勝利」「プロシャ軍国主義の一掃」「この戦争を最後の戦争とするために」闘うのである。

人民が四年以上に渉って欺かれたこのカモフラージの背後には、結局所有者階級の経済的利益が潜んでいる、と論じられるかもしれない。しかしそれは要点ではない。決定的な要素は人民の倫理的感情や正義感に訴えることなしに、戦争は不可能だということである。「神はイギリスを罰し給う！」「ドイツ人奴を殺せ！」、これらのスローガンは所有者階級のたんなる経済的利益以上に、あの戦争において奇蹟を成し遂げた。このことは人間が戦争に突入するには、その前に彼らが高揚した情熱に動かされなくてはならない事実を証明し、さらにこの情熱は精神的な、道徳的な動機によってのみ喚起される事実を明らかにしている。

資本主義時代における戦争はいずれも純粋に経済的動機から起こる、と絶えず労働者階級に説得していた当の人々が、第一次大戦勃発と共にその史的、哲学的理論を放棄し、国家の問題は階級の問題より大事だと言ったのではなかったか？　彼らはマルクス主義者の勇気ある信念とともに、「共産党宣言」における「今日まで、すべての社会の歴史は階級闘争の歴史であった」という言明を支持していた人々であった。

レーニンやその一派は戦争当初のほとんどの社会主義政党の誤謬を、指導者たちの思い上った責任の恐怖に帰し、烈しい言葉でこの勇気の欠如をなじっている。この場合それをあまり勝手に一般化することをわれわれは怖れるが、ともかくこの主張には多分の真理が含まれている。しかしそれは何を証明するだろうか？

もし大多数の社会主義指導者を導いて、彼らの愛する祖国の利益を守るに至らせたものが、事実、責任の恐怖であり、道徳的勇気の欠

如であるとするなら、これはわれわれの見解の正しさのいま一つの証拠にすぎない。勇気や憶病は現存の生産様式によっては条件づけられず、ただ人間の心理的感情に根ざしている。しかしもし純粋に心理的な動機が、何百万を数える運動の指導者たちに、このような強制的な影響力を及ぼし、雄鶏がときを作る前からその根本的な原理を放棄させ、社会主義労働運動の最悪の敵と手を組み、いわゆる異端の軍勢に向って行進させるとするなら、それは人間の行動は生産条件によって説明できないこと、しばしばもっと対照的な立場を取ることもあることを証明するだけである。歴史上の各時代は、そのためにあり余るほどの証拠を用意している。

従って最近の戦争を相反する経済的利害の必然的結果としてのみ説明することは、明らかに誤りである。資本主義はいわゆる「世界産業の巨頭連」が、原材料の資源の所有や市場や開発の縄張りについて平和的に協定できるなら、なおこれからも続くであろう。それは一国内の種々の経済的利害の持主が、それぞれの場合を腕づくで取極めすることなく協定に達する場合に似ている。すでにいくつかの国際的な生産のための組織が存在しており、そこでは特定の産業の資本家たちが、各国の商品生産に一定の限度を設けている。このようにして彼らは根本的な原則を相互に承認することによって、彼らの部門での総生産高を規制している。ヨーロッパでの国際鉄鋼トラストはその一例である。このような制約によって資本主義はその本質的な性格を少しも失っていない。その特権は無傷である。事実、賃金奴隷軍への支配権はかなり強化されている。

全く経済的にだけ考えるなら、第一次大戦は不可避ではなかった。資本主義は戦争がなくとも生き残ることができた。実際もし資本主義的秩序の番頭たちが戦争の結果を予測しえたなら、それは決して起こらなかったであろう、と確信をもって言うことができる。

第一次大戦で重要な役割を果たしていたのは、経済的利害に止まらず、政治的動機こそその破局の到来に多大の力となっていた。スペイン、ポルトガルの没落後、ヨーロッパはオランダ、フランス、イギリスの支配するところとなり、彼らは互いに競争者として競い合った。オランダはその指導的位置を急速に失い、ブレダ条約後ヨーロッパの政治問題へのその影響力は次第に弱まった。フランスもまた七年戦争後かつての優位のほとんどを失い、それを恢復することはできなかった。とくに財政上の困難は日増しに深刻になり、大革命を発生させた前例のない人民の弾圧を行うようになった。その後ナポレオンはフランスがヨーロッパで失った地位を恢復しようとして畢生の努力を傾けたが、彼の偉大な努力も徒労であった。イギリスはナポレオンの不倶戴天の敵となった。ナポレオンは彼が軽蔑して呼んでいた「商人国家」イギリスを征服しない限り、世界征服を目論む彼の意図の決して実現されないことを早くから理解していた。ナポレオンはイギリスが全ヨーロッパを彼に対抗するよう組織した結果、勝負を失った。それ以来イギリスはヨーロッパのみならず、全世界で指導的な地位を保ってきた。

しかし大英帝国は他の帝国と違って、地続きの領土ではなかった。その領土は五つの大陸に拡り、その安全はイギリスがヨーロッパで占めている権力的地位に依存していた。この地位を危くすることは、イギリスの植民地領有を脅かすものであった。大陸で巨大な陸軍と艦隊、官僚制度、資本主義企業、高度に発達した産業、外国との通商協定、輸出や領土や市場の拡張の必要等を備えた近代的大

国家の出現が予測されない限り、世界の王者としてのイギリスの地位はいささかも揺がなかった。けれども大陸の資本主義諸国が強大になるにつれて、イギリスはその主導権を失いはしないかと怖れだした。新しい貿易を確保したり、原料を供給する領土を維持したり、諸外国との通商協定によって輸出の伸長を計ったり、拡張政策を遂行したりするヨーロッパ諸国の政策は、必然的にイギリスの勢力圏と多少の摩擦を生じ、イギリスの隠然たる勢力を窺っていた。

このために大陸に優勢な力をもつ国家が出現しないよう努めること、それが不可能なら、全勢力をあげて互いに拮抗させるよう計ることが、イギリスの外交政策の主要問題となっていた。従ってプロシヤ軍によるナポレオン三世の打倒やビスマルクの外交政策は、イギリスの非常に歓迎するところであった。なぜならフランスの力はそのため何十年かそがれたのである。けれどもドイツの軍備の発展や植民政策の着手、とくに艦隊の建造と漸次に大きくなってゆく拡張政策（ドイツの「東方への熱望」はイギリスの注目するところとなり、非常に怖れられた）は、大英帝国の指導者たちが看過できないほどの危険を蔵してきた。

イギリスの外交官が時を移さずに、この危険に対抗すべく八方手を尽したことは、彼らが本来他国の外交官よりも抜目なく、俊敏だということにはならない。「不実なアルビョン」についての無駄話は、「文明の戦争」というおしゃべり同様、愚劣である。イギリスの外交政策がドイツのそれに優っており、その秘密計略の点で賢明であったとするなら、それはイギリスの外交官がより長い経験を持っており、幸いにしてビスマルク以後のドイツの責任ある政治家のほとんどすべてが、皇帝の無気力な取巻きにすぎなかったからである。彼らはみな無責任な精神病者や、欲得づくの彼の一味の危険な行動に反対する勇気を持たなかった。

けれどもこの悪の根本は個々人のうちではなく、誰がそれを行い、またその追求した直接の目的がなんであったかに係りなく、政治権力それ自体のうちに求められなくてはならない。政治権力はそれが個人の良心にとってどれほど犯罪的にみえようとも、それが結果を約束し、国家の理由、さらに国家の目的に一致する限り、あらゆる手段を使用してもよいと考えている。

政治権力の現実の手段を体系的に集め、国家的理由の名の下に、それらを正当化した勇敢なマキアベリは、すでに『ローマ史論』において、はっきりとこのことを示している。「もしわれわれが専心祖国の福祉のためにつくそうとするなら、われわれは正邪や憐憫や残忍、名誉や恥辱によって動かされてはならない。われわれは下らぬ異論などで日を送らず、国の存続を救い、その自由を守る手段をつねに講じなくてはならない。」

完全な政治権力にとって国家のために行われたすべての犯罪行為は、それが成功した場合には賞讃すべきものとなる。国家は善悪を超越している。それは地上の絶対者であり、その決定は深遠で、一般人民の測り知る限りではない。それは神の力によって信者に定められた運命のようなものである。神学者やサンスクリット学者の説によると、神は忖度しがたい知恵をもって、もっとも残忍で怖しい手段を使い、彼の意図の実現を計るというが、国家も同じことで、政治神学の理論によると、その支配者が冷血な一六勝負で、何百万の人命や財産を犠牲にしても、一定の目的を達成しようと決意した時には、一般人の道徳の掟には拘束されないのである。

外交官が敵が仕掛けたわなに落ちた時、彼の敵の奸計や良心の欠如を非難しても始まらない。なぜなら彼も反対側から同じ目的を追及しているのであり、ただ彼の敵の方が彼より絶対者の役割を上手に演じたために、敗北を喫したにすぎないのだからである。国家のうちに人格化されている組織された力なしに、生存はできないと信じている者は、この仮構の信念のすべての結果を受容れ、この邪神に彼のもつもっとも貴重なもの、すなわち彼自身の個性を犠牲にする覚悟でなければならない。

第一次世界大戦の勃発に重要な役割を買ったのは、大資本主義諸国の運命的な進化から生まれた政治権力の闘争である。諸国の人民、特に労働者が事態の重大さを理解せず、外交官、軍国主義者、利得者の地下組織に、決定的な抵抗を挑む道徳的勇気を振い起こしえなかったために、この破局を止める力が地上になくなってしまったのである。こと数十年、強大国家は互いに相拮抗する巨大な軍営の如き観を呈し、公然と武装し、一触即発の時に備えていた。世界が眼にみえて深淵に向かって転落しているのは、それが起こるべくして起こっているのではなく、各国の大衆がどんな恥しらずな取引きが彼らの背後で行われているかについて、いささかも知っていないためである。彼らは彼らの信じ難いほどの不注意や、とくに彼らの指導者は絶対に誤りを犯さないという盲目な信念、そして四年以上の間、意志のない羊群のような人殺しに彼らを導いた、いわゆる精神的指導者に感謝しなくてはならない。

しかし流血の惨に間違いなく責任のある、財界や産業界の大立者すら、ただ資源獲得の野望に駆られて動いたのではなかった。資本家を利潤製造機とみる見解は、プロパガンダの要求にはもってこいであるが、それはあまりに偏狭にすぎ、現実とかけ離れている。現代の巨大な資本主義制度のうちにあって、政治権力の利益は往々にして純粋に経済的な考慮を凌駕している。もちろんそれを別々に区分することは難しいけれども。その指導者たちは権力の好ましい味を知りつくしており、昔の征服者と同じような情熱でそれを讃美する。それはドイツの貨幣危機におけるヒュゴー・シュティンズやその一派のように、政府の敵の陣営にいる場合でも、彼らの国の外交政策に決定的に干渉する場合でも同じである。

何百万の人間を一定の意志に従属させ、全帝国を少数者の秘密な目的に役立つよう動かそうという病的な欲望は、しばしば純粋に経済的な考慮や、より大きな物質的利潤の見通し以上に、現代資本主義の典型的な代表者の間にあってはっきりと現われている。利潤を漸次に蓄積するくらいの欲望では、今日の資本主義寡頭政治の頭目たちは満足しない。彼らはみな莫大な富の所有が、個人のそして彼が属している閥の手中に、どれほど尨大な権力を委ねたかを知っている。この自覚は誘惑的な刺戟を彼らに与え、典型的な支配意識を作り上げた。その結果は独占の事実それ自体より、しばしば一層破壊的であった。これがすべての反対を却け、平等を許さない産業界及び財界の近代的大皇帝の心的態度である。

資本と労働の大闘争において、この野蛮な支配精神は直接の経済的利害以上に、決定的な役割を演じている。初期の小製造業者はなお労働者大衆と親密な関係を持ち、それ故多かれ少なかれ彼らの立場を理解することもできた。けれども現代の貨幣貴族は、十八世紀の封建領主と農奴との関係ほどのちかしさも、人民大衆との間に持っていない。彼らは大衆を彼らの経済的な、政治的な利益のために

利己的に利用すればよい、集団的な対象としか思っていない。彼らは一般に大衆のひどい生活条件を全然理解していない。非良心的な野蛮さや、権力欲、すべての人間的権利への軽侮、他人の悲惨に対する無感動なよそよそしさは、ここに由来する。

彼の社会的地位からして、現代の資本家の権力欲は無制限になる。彼は思いやりのないエゴイズムをもって彼の同胞の生活に干渉し、他人に対して絶対者のように振舞う。諸外国のみならず、自国の人民をも支配しようとする、この熱狂的な政治権力への欲望を考慮に入れる時に始めて、われわれは現代資本家の典型的な代表の性格を真に理解できるのである。彼らが将来の社会組織にとってそれほど危険なのは、まさしくこの特性の故である。

現代の独占資本主義が国家社会主義者やファシスト反動を支持していることは故なしとしない。この反動は労働者大衆のいかなる抵抗も粉砕し、産業的奴隷制を樹立しようとしている。そこでは生産者は経済的な、社会的な条件の成行や性格に全然発言できない、ただの経済的な機械人間とみなされる。この帝王政治主義的狂気はとどまるところを知らない。それはあまりにもしばしば、人民の心血をもって購われなくてはならなかった過去の業績を、屁とも思わずにふみにじっている。それはすべての社会活動をその意志の定めた厳格な型に拘束しようとする計画に邪魔する、最後の権利、最後の自由をも野蛮な暴力をもって強奪しようとつねに準備している。これが今日われわれを脅かし、直接われわれに立向かっている最大の危険である。独占資本主義権力の計画の成功か失敗かは、近き将来の社会生活の構造を決定するであろう。

(1) Fernando Garrido, "La España contemporanea" Tome I. Barcelona, 1865. この著書はガリドの他の著作、とくに "Historia de las clases Trabajadores" と同じく、豊富な資料を集めている。

(2) Praxedes Zancada, "El obrero en España: Notas para su historia politica y social". Barcelona, 1902.

第二章　宗教と政治

われわれに知られている歴史のすべての時代を通じて、二つの勢力がつねに闘争を繰返している。公然とした、あるいは隠然たる相互の敵意は、両者の勢力の間にある本質的な相違や、それらが表現された際の相対する活動から生じている。このことはあらかじめ出来上っている仮説や、一定の解釈の公式にこだわらずに、人間の社会構造を研究しようとする人々、とくに人間の意図や目的は宇宙における事物一般にみられるような機械的な法則に従属しないことを知っている人々には明らかである。われわれはここで、歴史における政治的要素と経済的要素について語っているのである。あるいはまた、政治的要素と社会的要素と呼ぶこともできよう。厳密にいうなら政治的な概念と経済的な概念は、この場合いくらかせまく考えられている。最近の分析によると、すべての政治はその根を人間の宗教的概念に持っており、一方、経済的な事物は文化的な性質で、それ故社会生活における価値創造の力ともっとも親密な関係にある。それ故われわれは宗教と文化の間での内的対立について、語らざるをえないのである。

政治的と経済的、政府的と社会的、あるいはさらに大きな意味で、宗教的と文化的という表現は、多くの対照点をもっている。それらはすべて人間性より生じたもので、それ故それらの間には内的

なつながりがある。ここでわれわれはただこれらの表現の間に存するつながりについて、さらにはっきりした見解を得たいと考えている。歴史上のすべての政治形態は一定の経済的基礎を持っているが、それはとくに社会進歩の後期の段階に著しい。他方、政治形態が経済的な、また一般的文化生活の条件の変化に従属し、それとともに新しい姿を取っていることも否定できない。しかしすべての政治の内的な性格はつねに同一である。それはその外的な形式の変遷にもかかわらず、すべての宗教の内的な性格が決して変わらないのと同じである。

宗教と文化は人間の自己保存の本能にその根を持っている。それが宗教や文化に生命と形式を与えるのである。しかし一度それらが生命を持つや、それはそれぞれ各々の道を進んでゆく。なぜならそれらの間に有機的な結びつきはないのだから。このようにしてそれらは敵対する星のように、互いに相反する方向を求めてゆく。この敵対を見過したもの、ないしはどんな理由であれ、それにそれが受けるに値いする考慮を払わなかったものは、決して社会的事実の内的連結を明確に捉ええないであろう。

宗教の領域が一般にどこで始ったかについて、今日までのところ意見は二つに分れている。しかし人間の宗教的概念の根底が思弁哲学のうちに見出されないことははっきり認められている。われわれはすべての宗教はただ絶対精神への精神の上昇を示すものであり、人間と神との結合を見出そうとしている、というヘーゲルの概念が少しも宗教の起源を説明しない空虚な言辞にすぎないと考えてよい。各国民に特殊な歴史的使命を授けた「絶対の哲学者」は、歴史上のすべての人民はそれぞれ典型的な宗教形式の担い手である、と主張した時に同じように専断的であった。彼によると中国人の中庸の宗教、カルデア人の苦痛の宗教、ギリシヤ人の美の宗教等々と並べて、ついに宗教体系の発展は「啓示宗教」であるキリスト教に終るのである。その伝達者はキリストの人格のうちに、人間と神との結合を理解していたという。

科学は人間を一層批判的にした。いまではわれわれは初期の社会的な、精神的な生活現象を解明する際に、社会学や心理学が用いるのと同じ方法を、宗教の起源やその漸次の形成の研究の際にも用いなくてはならないことを知っている。

イギリスの言語学者マックス・ミューラーのかつては広く支持された見解も、今日ではほとんど共鳴者を見出さない。彼は宗教のうちに無限なるものを説明しようとする人間の内的な熱望を見出したと考え、自然力の姿が人間のうちに最初の宗教的感情を触発したのだから、自然崇拝を宗教の最初の形式と考えて間違いない、と主張したのである。今日の民族学的宗教研究の大家はほとんど、幽霊や故人の霊魂を信ずるアニミズムが、人間の宗教意識の第一段階であるという意見をもっている。

未開の遊牧種族の生活様式のすべて、例えば彼の相対的な無知、彼の夢見の精神への影響、彼がしばしば忍ばねばならぬ断食、死と対決する際の彼の理解の欠如——これらすべてが彼を生まれながらの千里眼の持主とし、幽霊信仰はいわば彼の血にしみこんでいるのである。彼が想像でこの世に存在するとおもい込んでいる幽霊と争った時感じるものは、主として恐怖である。この恐怖は彼が当り前の敵ではなく、尋常の手段では会うことのできない、眼にみえない力と争っていることになるので、一層彼をてこずらせる。ここから

全く自発的に、これらの力の好意を得、その奸計から逃れ、なんとかしてその寵児になろうという欲望が湧いてくる。ここに現われたものが、未開人の自己保存に対する赤裸な熱望である。

アニミズムからフェティシズムが発生する。それは幽霊がある対象、あるいは一定の場所に住んでいると考えるのだが、今日でもその信仰は文明人の迷信のうちに生き延びており、彼らは幽霊が歩いたり、話したりし、また幽霊のさまよう場所のあることを確信している。ラマ教やカトリック教会の宗教儀礼も、本質的にはフェティシズムである。アニミズムや初期の粗雑なフェティシズムの考えを、すでに宗教とみなすべきか否かについて意見が分れている。しかしすべての宗教的概念の出発点をここに求める点ではほとんど問題はない。

宗教は一般に儀礼に示されているように、「幽霊」と人間の同盟をもって始まった。原始人にとって「幽霊」もしくは「霊魂」は抽象的な観念ではなくて、全く具体的な概念であった。それ故彼が崇拝と屈従の具体的な証拠を示して、諸霊を動かそうと努めたのはごく自然であった。このようにして彼の頭脳に犠牲の観念が浮んだ。また度々の経験から、殺した動物や敵の生命が流れ出る血とともに失われてゆくことを学び取り、そこで彼は早くから血が「もっとも貴重な精」であることに気づいた。この知識は犠牲の観念に特殊な性格を与えた。たしかに血を捧げることが犠牲の儀礼の最初の形式であり、さらに原始的な狩猟種族の生活には必要であった。疑いもなく宗教意識のもっとも古い産物の一つである血を捧げる観念は、現今の大宗教制度のうちにも存続している。キリスト教の聖餐式における、キリストの「肉と血」のパンと葡萄酒による象徴的な変形はこの一例である。

犠牲はすべてこの宗教的な慣例や祝祭の中心点となった。それはまた呪文や舞踊や歌謡のうちに表れ、次第に特別な儀礼のうちに凝固していった。犠牲の捧げ物は最初純粋に個人的な事柄であり、銘々が彼の必要にふさわしい捧げ物をしたが、しかしこの状態は長続きせず、道士や祈禱士等々のような呪術士型の職業的僧侶の取って代るところとなった。フェティシズムからトーテム崇拝に発達して、特殊な魔術士的職業の進化はさらに助長された。トーテム崇拝とは普通その種族の起源とされている動物の形をとった種族神の信仰のことである。これとともに宗教はかつてなかったような社会的性格を帯びた。

われわれが宗教をそれ自身の漸次の進化の光に照らして考えるとき、われわれは二つの現象がその本質をなしていることに気づく。即ち宗教はまず、より高い未知の力への人間の依存の感情である。これらの力が彼に恩恵を与えるような方法と手段を求め、その有害な影響から自らを守るために、人間は自己保存の本能に駆りたてられる。このようにして儀礼が起り、それが宗教に外的な性格を与えるのである。

犠牲の観念は、原始時代の原始人の制度と組織に広く行われた種族の指導者や首長に自発的にあるいは強制的に贈物を捧げる慣習に由来しているという主張は、ある可能性を持っている。だがこの制度のない原始人が決して犠牲の観念を持たなかったという主張は、われわれにとって大胆にすぎるようにみえる。

宗教的な概念は、事物について何故、いかにしてという疑いが人間の頭のうちに起った時にのみ生じうる。しかしこれはかなりの心

的発達を予想させる。それ故この問が人間のものになる以前、長い時間が経過したと考えられる。原始人が彼を取巻く世界について描きだした概念は、最初は感覚的な性質をおびていた。それは子供が彼の周囲の対象をまず感覚的に捉え、その起源についての疑問が出てくるまで、長い間それを用いているのと同じである。さらに原始種族の祝祭のほとんどすべてが、犠牲の儀礼に結びついているように、多くの野蛮人の間では今日も故人の霊に食事を捧げる慣習が残っている。それ故犠牲の観念がなにかそれに先立つ社会的慣習との関連なしに起こることは、たしかに可能である。

だがそうであるとしても、数千年の間に出現した各々の宗教体系のなかに、彼自身の想像によって存在し、彼がその奴隷になっているより高い力への人間の依存が反映されていることは事実である。すべての神々はそれぞれの時代をもっていた。しかし宗教それ自体はその外的な形体のあらゆる変化にもかかわらず、その中核においてつねに同一である。宗教はつねに人間の真の本質を犠牲に捧げる幻想である。創造者はこの悲劇を意識することなしに彼自身の創造物の奴隷になる。どの宗教の内奥の本質も変えることができない。それ故有名なドイツの宗教教師ケーニヒはカトリック教徒の教科書の第一ページに次のように書くことができた。「宗教は一般に神のとくに至上の支配者としての神の人間に対する関係の認識と尊崇である。」

このように宗教はごく粗雑な原始の始めにおいてさえ力、超自然的優越性、真の信者の上に立つ権力、一言にしていえば支配者気質の観念ともっとも緊密に結びついていた。近代の言語学は種々の神々の名前が権力の観念を内包している概念の表現に由来している、ということを立証する多くの実例をもっている。権威原理の支持者たちが、その起源を神に求めるのも理由のないことではない。なぜなら彼らにとって、神格はすべての権勢と力の縮図のようにみえぬだろうか？　ごく初期の神話のなかで、英雄や征服者、立法者、種族の長老は神もしくは半神として現わされている。彼らの偉大さと優越が神性の唯一の起源なのである。ここでわれわれは支配制度の根底に到達し、すべての政治は最近の場合でも宗教であり、人間の精神を依存の鎖につなごうとするものであることを理解するのである。

ノルドウや他の人々が唱えているように、宗教感情がその最初から現実の権力制度の抽象的な反映にすぎないかどうかは大いに議論の余地がある。ホッブスや他の多くの後継者のように人類の最初の状態を「万人に対する万人の闘争」とみる人々は、悪意をもつ粗暴な最初の神々の性格のうちに、彼ら自身の種族や異国人を恐怖に陥し入れる専制的首長や好戦的指導者の、正真正銘の符合を見出しがちである。われわれがかつて殺戮や強奪をやってきた狡猾で残忍な徒と同じ角度で今日の「野蛮行為」を眺めてから、やがて世界の各地における近代民族学の多角的な成果が、われわれにこの考えの根本的に誤っている証拠を提供するまで、そう長くはかかっていない。

原始人が一般に彼の精霊や神々を暴力的で怖しいものに描くのは、必ずしも地上のモデルを借りたわけではない。未知な一切（単純な精神には理解しがたいもの）は、精神にとって不気味な怖しいものである。不気味なものから、ぞっとするもの、怖ろしく、こわいものへは一歩である。このことは人間の想像力が彼に論理的な反論を行わせるほどの豊富な経験の集積に影響されていない、あの長く忘れられた時代にあって一層真実であった。しかしよし宗教的概念を地上の権力の行使に由来すると強いて主張しないにしても、人間進化の後期において、宗教の外的形式がしばしば個人や社会における少数者の権力の必要から決定されたことは事実である。

特定の人間集団の他者の対する支配の実例によると他人の労働生産物や道具や武器を自分のものにしたり、一層安楽に生活できると思われる土地から、彼らを追放しようという願望がまず現れている。長い間勝利者がこの単純な掠奪形式で満足していたことはありうることである。彼らが反抗に出会った時、彼らはただ反抗者を皆殺しにしていた。しかし次第に降伏者から貢物を取立てたり、彼らを支配することによって、彼らを新秩序に従属させたりした方がさらに有利であることが分ってきた。ここに奴隷制の基礎がすえられた。これは相互連帯が同じ種族の間にのみ拡り、そこにその限界を見出す場合、さらになんでもないことであった。すべての支配制度は最初外国人支配であった。そこでは勝利者が特別な特権階級となり、敗北者に彼らの意志を押付けた。一般に定住している農耕民に彼らの支配を強制したのは、遊牧的な狩猟種族であった。絶えず活動と忍耐とを強く要求される狩猟の仕事は、彼を自然と好戦的に、掠奪的に仕立てた。しかし彼の土地に縛られ、一般に平和で危険の少い生活を営む農民は、多くの場合暴力的な争いの仲間ではなかった。そこで彼は好戦種族に対抗しえず、外国人の支配があまり圧制的でないなら、比較的容易に服従した。

一度勝利者が権力の味を覚え、それが与える経済的な利益を評価することを知ったら、彼はたやすく権力の行使に酔ってしまう。すべての成功は彼を新しい冒険へと駆立てる。なぜなら権力の所有者がその影響力の範囲をつねに拡大しようと努め、弱少民族に軛をかけるのがすべての権力の性質なのである。こうして他に対する戦争と支配をこととする、一つの独立した階級が次第に進化する。けれども権力はいつまでも暴力にのみ頼ってはおられない。暴力は人間を服従させる直接の手段だが、それだけで個人もしくは特殊な階級が全人間集団を支配し続けることはできない。それ以上のものが必要である。即ちこのような権力を必然不可避とする人間の信仰、その神聖な意志による使命への信仰が必要である。こうした信仰は深く人間の宗教感情に根ざしており、伝承の助けで力を得ている。というのは、伝承的なものは宗教的概念と神秘的拘束力の輝かしさを昂めるものだからである。

勝利者が応々にして彼らの神を敗北者に強制するのはこのためである。彼らは非常にはっきりと、宗教的儀礼の統一が彼ら自身の権力を伸長させることを理解している。よし敗北者の神が生き残りえたとしても、それが勝利者の統治に危険でなかったり、あるいは古い神が新しい神に従属的な役割を果している限り、問題にはならない。しかしこれは敗北者の僧侶が勝利者の支配を賞讃したり、しばしばみられることだが、政治権力の追求に自らも加わった時にのみ起ることである。従ってバビロニア人、カルデヤ人、エジプト人、ペルシャ人、インド人その他多くの人種の、より後期の宗教形体への政治的影響を立証することはたやすい。同様に、ユダヤ人の有名な一神教を、勃興する王国の政治的統一のための闘争から割出すことも容易である。

（つづく）

編集後記

断続的に連載してきた「人間における遊戯と労働」は尻切れトンボで申訳ないが、日暮れて道遠しの感深く、打切ることにした。すこし構想を変えて、「遊戯と労働の弁証法」と題する本としてこのテーマをまとめてみたい。「労働と機械」はそのなかの一章である。

相次ぐ新幹線事故にゆらぐ機械信仰、などと新聞は書き立てるが、われわれの生活から機械がなくなったら、すさまじい混乱が生ずるにちがいない。まず地下街は暗黒となり、空気は濁り文字通りのゴーストタウンとなるだろう。新聞も、黒の手帖もザ・エンドである。その時の未来風景を描く想像力豊かな作家はいないものだろうか。

◇

秋山清『『大杉栄の旅』小感』は日本に留学したフランス人学生の好意による、大杉栄逮捕当時のフランス各紙の記事を紹介している。これは得難い資料である。

それにしてもこれだけの記事のコピーに三カ月を要したという阿竜の手紙は驚きだ。その事情はよく分からないが、たぶん複写設備が普及していないのだろう。国会図書館だったらおそくとも一週間で出来る。

もっとも国会図書館もお役所仕事で、コピーを依頼する申込書に一々捺印させる。印鑑のない者は拇印をおせ、という。無料ならまだしも、ちゃんとコピー代金を取って、その上拇印まで寄越せ、というのだから、愚劣きわまりない。最新式の複写設備と最も原始的な捺印方法の共存――これぞ一九七〇年代の日本である。

◇

ペイラツ「スペイン革命におけるCNT」に代わって、ロッカー「ナショナリズムと文化」の連載を始める。「まえがき」にも書いたとおり、第一部の訳稿はかれこれ二十年近く前に完成していた。まさにほこりを払って、というところだが、連載に際してはほこりだけでなく、訳文の誤りや生硬な個所に手を入れた。約八百枚余りだから、連載は十回余という勘定になる。それまでなんとか『黒の手帖』を持ちこたえたい。

◇

十三号の製作原価は一冊当り一七二円であったが、十七号はなんと三七〇円にはね上った。倍以上である。部数をおとしたためでもあるのだが、全く狂乱としかいいようがない。

ここで五〇円ぐらい値上げしても焼石に水でしかないが、しかし、『黒の手帖』をもう五年つづけていくために、あえて三〇〇円に値上げする。諒承してほしい。

黒の手帖　第十八号
一九七四年十一月三十日
発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社　東京都新宿区北山伏町三三（大沢方）郵便番号一六二
振替・東京一〇二四六五

印刷所・株式会社清水印刷所　東京都新宿区戸塚町三丁目一五〇

定価・三〇〇円
送料五五円
二号分前納・七〇〇円
四号分前納・一四〇〇円
（いずれも送料共）